

松木 繁〔著〕

臨床技術としての催眠療法

——「催眠トランス空間論」から学ぶ

A5判並製・誠信書房

2025年10月刊

定価2,420円（税込）

評者＝岡本かおり（清泉大学）



日本に催眠療法を専門とする心理職はどれくらいいるのだろう。日本催眠医学心理学会では、認定催眠士21名、指導催眠士12名の氏名が公表されている。日本臨床催眠学会では氏名こそないが、臨床催眠資格、臨床催眠指導者資格の認定基準が公表されており、いずれの資格も専門性の維持に相当の研鑽が必要と推測される。評者には心理職として懂れてやまない領域が2つあり、それはロールシャッハテストと催眠療法である。前者はとっくに諦めてしまったが、催眠については時折エリクソン催眠の研修を受け、「いつかは！」と希望の風船を膨らませている。

著者の松木氏は、押しも押されもせぬ催眠療法家（認定臨床催眠指導者資格、認定指導催眠士、日本臨床催眠学会前理事長）である。そのため、1ページ目から最後までワクワクが止まらぬ状態で読み終えてしまった。本書はタイトルに「臨床技術としての」とあり、「催眠療法」でないとミソなのだ。読み進めながら、停滞している（ように見える）自身の面接が思い出され、（催眠療法を実施していないのだが）次回はこうしたらどうだろう、クライアントはこう言いたったのではないかなどと気づかされることが度々あり、本書には発想を呼び起こす何かが散りばめられているように思う。さて、勇気を出して、評者なりの解説を試みたい。

著者は職業人生をかけて催眠療法を実践し、「徹底的に臨床的事実から見る」という臨床姿勢を貫いてきた。臨床的事実に着目すると、合理的な説明がつかない「はて？」と疑問に感じるような「非科学的な特異現象」があることに気づいていく。臨床をある程度やっていると誰にでも、クライアントがなぜ良くなったのか理由がわからないとか、セラピストの意図と異なる反応が生じて冷汗をかけた経験があるはずだ。クライアントを深いトランス状態に導く催眠療法では、変化を早く生じさせることができる反面、説明のつかない

場面と出会う機会も多いことだろう。

著者は疑問の解明のため、そして臨床実践を効率よく行うため、臨床の技を磨き、事例と向き合った結果、古典的な催眠の捉えとは異なる共感的な「（セラピスト－クライアント間の）関係性」の視点を加え、臨床実践の場を立体的に捉える「催眠トランス空間論」を考案し、それは「松木メソッド」と呼ばれるようになった。これが机上の空論とは真逆に、半世紀にわたる臨床実践から紡ぎ出され、既存の理論を取り入れながら精練されたあつては、すべての臨床家にとって一読の価値があることは疑いようもない。前半の催眠の歴史的な意味、著者の発表事例の再考、誘導暗示の逐語的記述からも大いに学べるし、後半の催眠トランス空間論（松木メソッド）の展開は圧巻である。初学者にとって耳慣れない用語や発想、難解な記述もあるが、要所所で丁寧に繰り返しの説明にも出会う。「改めて催眠を深く知りたい」「人間の潜在能力に近づく方法を知りたい」「臨床技術を催眠療法から学びたい」人々にうってつけの良書なのである。